第66弾

ちっちゃなころから図書館で～♪

F「新年度、最初のテーマは、初心にかえって「図書館」！です！ みなさんは、やはり小さいころから図書館に行ったりしていましたか？」

T「地元の図書館に・・・・・・それでもバスとか使わなきゃいけなかったですけど」

M 「わたしも、行ったら毎回おんなじ本を借りてたみたい。返却して、係の人がその本を棚に戻したらそれをまた借りてたって家族から聞いたよ」

F「そこまで何度も読むんだったら買ってもらったりとか・・・・・・」

M「そう言ってもらったみたいなんだけど、わたしが、図書館で借りるからいいって言ったらしいのよね～」

F&T「図書館の申し子・・・・・・！」

F「ちなみにどんな本だったんですか？」

M「マイナーな本らしくってなかなかそのあと出会えなかったのよね。大人になってから見つけて読んでみたら何がそんなに響いたのかわかんなかったんだけど」

F「Tさんは、そういう思い出深い一冊とかあります？」

T「うーん、わたし自身は一ミリも覚えてないんですけど・・・・・・」

F「一ミリも・・・・・・！ や、どうぞ続けてください」

T「えーと。小さいころにおばあちゃんに読んでってなんどもお願いした本があって。おばあちゃんは自分でアレンジしながら読んでくれたんですよね。そしたらわたしはまだ字も読めないのにそのまんま妹に読み聞かせ？してたらしいです」

M「女優・・・・・・！」

F「吸収力がハンパない・・・・・・！」

M「そういうFさんはなんかないの？」

F「わたしも休みごとに連れていってもらってましたね～。小さいころに読んだ本って作者とかタイトルとか全然覚えてなかったりするんですけど、絵の雰囲気とかちょっとしたエピソードとか覚えていて。大人になってから読むと懐かしいですね」

M「ずっと読み継がれている名作ももちろんだけれど、自分にとって大切な本ってそうした基準だけじゃ測れなかったりするよね。ほら、最後にいいこと言った！」

T「最後？」

F「実はMさんは今回で卒業です！」

M「ホンダラケ立ち上げメンバー最後の砦でしたが、これからはキミたちが盛り立ててくれたまえ！・・・・・・見てるからね」

T&F「が、がんばりますぅ」

←QRコードでもアクセスできます

インスタグラム公開中　ここにアクセスしてね★
https://www.instagram.com/hondarake55

Volume.73
YA通信

ホンダラケ

2026.4.1

めくるめく図書館

F「ページをめくれば、めくるめく本の館♪」
M&T「・・・・・・だじゃれ？」

『私と家族と「川の図書館」』

熊谷沙羅/著　有隣堂　2025年刊

016.2/25

新型コロナウイルスが流行した時期に開かれた「川の図書館」。河川敷に本を並べただけ。利用は自由。この取り組みを企画したのも実施したのも当時13歳、中学2年生だった熊谷沙羅さん。実施までのいきさつや、本が好きだったという幼いころのこと、そしてにぎやかな家族のこと。前向きな力にあふれた一冊です。
やってみようと思ったら、実現のために行動する。単純なようでいて、夢を実現させる唯一の方法なのだと力がわいてきます。

ホンダラケとは

本誌は、読者の身も心も「本だらけ」にしてやろうという心意気から生まれた中高生向け小冊子です。本誌に登場する本は全て三田市立図書館本館のＹＡ（ヤングアダルト）コーナーでご覧いただけます。
２か月に１度、年６回発行予定です。
ホンダラケは皆様の投稿をお待ちしております。ＹＡコーナーに用紙・ポストがございますので、おすすめ本や本誌の感想・要望などお寄せ下さい。

青春読書記
～三田学園図書委員会より愛をこめて～

テーマは「出会いと別れ」
出会いや別れがあるのは人と、だけじゃありません。例えば本と、とかね！

『ボトルネック』 米澤穂信/著 新潮社 2006年刊

主人公のリョウは恋人を弔うために東尋坊に行き、何かに誘われるようにその崖から転落。気がつくと自分が住んでいる町にいた。家に帰ると存在しないはずの姉がいて、自分が生まれなかった世界にいることに気づく。タイトルであるボトルネックは物事の進行を妨げる要因や障害のことを指している。青春ミステリーが好きな方におすすめの一冊です。

P.N. 橋本侑樹（高校２年生）

F/ヨネ

「こんな本、棚から見つけました」の コーナー

このコーナーでは、スタッフが棚を見て“再発見”をした本を紹介します

『12歳から始める人見知りしない技術
誰とでも打ち解ける 初対面に強くなる』

鳥谷朝代/著 秀和システム 2023年刊

人見知りを克服したい、人とうまく話せるようになりたいと思ったことはありますか？ あるなら、ぜひこの本を手に取ってみてください。人見知りを助けるたくさんの技術が載っていて、わたしたちに寄り添ってくれる一冊です。これならできるかも、やってみたい、と思ったものから始めてみましょう。春は「初めまして」が多い季節。自分も相手も心地いいコミュニケーションからスタートさせられるヒントがここに！

361.4/23

新着図書 Pick Up

『しらんけどな』 村上しいこ/著 さ・え・ら書房 2026年刊

「しらんけどな」。自身の発言に対して責任を回避するための無敵の言葉。ただし関西限定。この言葉をマンザイコンビ名にした中学生の港太と中津君。そして名付け親の絢香。コンビはうまくいっているように見えたけど、中津君の様子が最近おかしい。ダメ出し担当の絢香も進路に悩み中で、「しらんけどな」は解散の危機だ。やりたいことってなんだろう。とりあえずいい学校に行くのがいいのかな。三人三様の悩みの中で、自分を偽らずに生きていくことの大切さを教えてくれます。「しらんけど」なんて言わずに頑張ろー！

F/ムラ

難しいと思われているけれど、実は面白い
名作があるから読んでみてほしいんです。

『図書館員への招待』 塩見 昇・木下みゆき/編著 教育史料出版会 2022年刊

出版年は新しいですが、この本の初版は 1996 年、30 年前です。改訂を繰り返し何度も出版されてきました。果たして図書館司書という仕事はどういう仕事なのか、その内情は意外と知られていないのです。人が何かを知りたい、読みたいという希望を、資料という形で提供する。まぁ一言で言えばそうなんですが、私たちは提供に至るまでのプロセスをとても大切にしています。皆さんに図書館司書という仕事に少しでも興味をもってほしいな。

013.1/22